留学生日本語作文における格関係表示の誤用について

細　川　英　雄

キーワード
誤用分析・第2言語習得・格助詞・意味と用法・近接性

1.　誤用の領域とその考え方

まずはじめに，誤用の領域をどのように定めるかという問題について考える.

（1）　きのうの朝は，とてもつめたかった.

（2）　川の水は，とてもつめたいかった.

（3）　長い間風にあたっていたので，つめたくなった.

(1) のような場合，ふつう「朝」に対して「つめたい」ではなく「さむい」を用いる.「つめたい」の場合は，具体的な事物の状態に対する感覚で，「さむい」はある状況での本人自身の状態についての感覚だからである[1]. したがって，こうした誤用は，語彙の意味のレベルの誤用だと考えることができる.

これに対して，(2) のような場合は，「つめたい」の活用に問題があるわけで，テンスとの関係を含めて活用上の区別がついていないということになる. このことは，述語とその活用の問題と関わっており，「つめたい」という語の意味の問題というよりは，文構造の問題だということになる. したがって，(1) と (2) の誤用は，同じ形容詞の問題といっても，かなり

1)　細川(1989)参照.

質の異なる問題だということになろう．もちろん，こうした統語能力は，総合的な語彙力とも無縁ではないし，同一人物の誤用として同時に現れることもあり得るが，少なくとも，分析・検討の段階では別のレベルの問題として扱うのが妥当であると判断される．

さて，(3) のような場合は，とくに誤用と感じられないかもしれない．(1) の不自然さに比べればさほど大きな誤用ではないように感じられるかもしれない．しかし，もし，「つめたくなった」のが自分の身体であった場合には，ふつう「つめたい」は使いにくい．むしろ「さむい」という語を使うだろう．この文を見ただけでは語の適否は判断がつかない．つまり，(1) が語の意味のレベルの問題であるのに対し，(2) は前後の文脈との関係で規定される談話のレベルの誤用だということができよう．

このように，同じ形容詞に関する誤用であっても，どのようなレベルでの誤用であるかがその学習者の習熟度や理解度を考える場合にきわめて重要な要素を占めていることがわかる．したがって，誤用分析に当たっては，その領域や性格あるいは機能について十分見きわめることが必要になる[2)]．

以上のような考え方から，誤用分析のための分類には，まず〈1 語彙レベルの誤用 / 2 文構成レベルの誤用 / 3 談話レベルの誤用〉の 3 レベルを立て，さらに次のような〈分類項目〉を作成した．これは，細川 (1990b・1991) で示した誤用分類及びそのリストをもとにしたものである．本稿で部分的に修正を施した箇所もあるため，改めてここに一覧の形で示す．

〈分類項目〉

1　語彙レベルの誤用

1-1　音韻と文字表記の関係の誤用

引く音の誤用 / つまる音の誤用 / はねる音の誤用 / 清濁の誤用

---

2)　こうした誤用の領域についてそのおおよそはすでに寺村 (1972) に述べられている．

1-2　文字・仮名遣いに関する誤用

文字の誤用 / 送りがなの誤用 / 仮名遣いの誤用

1-3　語の選択に関する誤用

モノ(名詞)の誤用 / コト(動詞)の誤用 / サマ(形容詞・形容動詞・副詞等) / 複合辞等に関する誤用

2　文構成レベルの誤用

2-1　単文構成上の誤用

2-1-1　述語の種類と格助詞の選択に関する誤用

2-1-2　述語の活用に関する誤用

2-1-3　述語の補助形式(ヴォイス・テンス・アスペクト等)に関する誤用

2-1-4　修飾成分に関する誤用

2-1-5　主題取り立て及びモダリティの形式に関する誤用

2-2　複文構成上の誤用

2-2-1　接続形式に関する誤用

2-2-2　名詞句構造に関する誤用

2-2-3　引用形式に関する誤用

3　談話レベルの誤用

3-1　場面・文脈との関係に関する誤用

3-2　成分の欠如・重複

3-3　文体的レベルの誤用

2.　調査の対象と分析

2-1　調査の対象

調査対象とした日本語作文の資料は，次の通りである.

① パリ第三大学 INALCO のフランス人学生による日本語作文

② 金沢大学学生部日本語講座の留学生日本語作文

③ 早稲田大学日本語研究教育センターの留学生日本語作文

① は1983年10月から84年9月までのパリ第三大学 INALCO (当時)

におけるフランス人学生(2年次)33名による日本語作文558文で，作文のテーマは「十年後の私」および「日本人の長所と短所」である．② は1986年10月から1989年3月までの3年半の間に金沢大学学生部で行われた日本語講座に参加した留学生および89年4月から同年9月までの同大学教養部「日本語」の授業を受講した留学生による日本語作文である．これは，ある程度レベルの進んだクラス(中級～上級)において実施され，または課題とされた自由作文を当時の各クラス担当者の協力を得て収集したもので，11ヵ国34人，計2277文によって構成されている．自由作文であるため，それぞれの内容・テーマはさまざまである．③ は1991年度の早稲田大学日本語研究教育センターの学部留学生を対象とした授業のうちの朝鮮語を母語とする韓国人学生の授業感想レポートの中から適宜14人分168文を抜き出し，その誤用をリスト化したものである．

このうち①・②は，細川(1990a・1990b・1991)に全文とその誤用分類を掲載したため，本稿ではこれを調査対象のためのテキストとした．

2-2　誤用の国別分布について

上の分類項目にしたがって，調査対象とした留学生の日本語作文における誤用と学習者の国別分布状況をまとめたものが次の表1である．

こうした分布状況について考えられることは，もしかりにすべての学習者に共通の誤用が生ずる場合，その誤用の領域は，さまざまな母語の別を越えた，日本語習得における共通した困難性であり，その分布が特定の学習者に片寄る場合は，その学習者の習熟度や母語の影響が強いという仮説が立てられよう．

そういう観点から，表1を見ると，まず語彙の選択と格助詞の選択において，すべての学習者が高い比率を示していることが指摘できる[3]．

---

3)　この分類は，3003文の日本語作文におけるすべての誤用をその領域別の分類したものであるが，誤用を犯していない箇所との比較ではない．したがって，誤用例中における比率には有り得ても，厳密な意味での誤用率にはなり得ない点に問題

このうち，語彙選択の誤用は，さまざまな形で広範囲にわたって行われており，一律にその性格を論じることは困難である．ただ，明らかに母語の置き換えと考えられるようなもの，母語の語彙を日本語に翻訳したと思われるもの等もあり，また，そのような影響関係を想定できないものも多い．漢字圏・非漢字圏によってもやや異なりが見られ，結論的なことを言うにはまだ時間が必要であるが，少なくとも，語彙選択の誤りには，学習者の母語の影響や学習の形態に大きく作用されるものから，さほどそうでないものまできわめて広範囲の誤用がみられることを指摘することができ，それがすなわち，第2言語習得において学習言語の語彙の意味・用法を的確に捉えることの困難性を物語るものということにもなろう．

これに対して，格助詞の誤用は，一般にテニヲハの問題として取り上げられることが多く，日本語のむずかしさとしてしばしば扱われる問題である[4]．一般に第2言語習得の問題は，学習者の母語との関係や距離で論じられることが多いが，対象言語の構造や意味・用法等の問題もまた無視できないと思われる．第2言語習得における日本語のテニヲハの困難性の原因がどのようなところにあるのかはいまだ明確でないことも多いが，本稿では日本語分析の立場から，その誤用の実態を具体的に考えてみようと思う．

が残る．長友(1991)は，誤用数の多い順では〈動詞・格助詞・名詞・係助詞・接続詞〉となるが，誤用率（正用と誤用との関係での比率）では〈接続詞・動詞・格助詞・係助詞・名詞〉の順となり，両者に相関関係のないことを指摘し，「従って誤用数が多いからといってその文法項目の学習が必ずしも困難であるとは言えないと考えられる」と結論づける．本稿では，文における機能を中心にして分類したため，正用と誤用との比率を算出することはむずかしく，この段階での比較はできないが，品詞別の分類を機能別の分類とかけ合わせてみることによってもう少し異なった結果も期待できよう．

4) 日本語の第二言語習得としてのむずかしさについては，早く水谷修(1961)があり，さまざまな問題について指摘されている．ただ，「これからの問題」でふれた母語獲得と第二言語習得の相互比較研究は，その後それほど進展しているとは思われない．

表 1　誤用の国別分布　国名の下の（　）内は学習者数を示す.

資料	①	②											③	合計
国名 / 分類	ﾌﾗﾝｽ (33)	ﾄﾞｲﾂ (1)	ｲﾀﾘｱ (1)	豪州 (1)	ｱﾒﾘｶ (3)	ｶﾅﾀﾞ (1)	ﾌﾞﾗ (2)	ﾏﾚｰ (3)	ﾀｲ (3)	ｲﾝ (1)	台湾 (4)	中国 (14)	韓国 (14)	(80)
1-1	25	11	0	4	13	3	92	5	38	0	10	50	32	226
%	7.0	22.0	0	2.8	7.1	6.3	18.9	3.7	12.5	0	3.7	6.6	27.1	9.2
1-2	21	6	0	9	3	4	62	3	21	2	8	32	5	150
%	5.9	12.0	0	6.4	1.6	8.3	12.7	2.2	6.9	2.3	3.0	4.4	4.2	6.1
1-3	102	4	4	38	51	8	112	32	56	27	84	199	20	615
%	28.6	8.0	20.0	27.0	28.0	16.7	32.0	23.5	18.4	31.4	31.0	27.2	16.9	25.0
2-1-1	54	13	7	20	23	8	107	33	45	10	67	139	12	472
%	15.1	26.0	35.0	14.1	12.6	16.7	22.0	24.3	14.8	11.6	24.7	19.0	10.1	19.2
2-1-2	14	0	1	4	6	2	10	11	3	3	8	22	7	70
%	3.9	0	5.0	2.8	3.3	4.2	2.1	8.1	1.0	3.5	3.0	3.0	5.9	2.9
2-1-3	28	1	1	8	6	2	7	7	19	15	25	39	5	130
%	7.8	2.0	5.0	5.7	3.3	4.2	1.4	5.1	6.2	17.4	9.2	5.3	4.2	5.3
2-1-4	8	1	1	5	8	4	6	1	16	5	2	24	4	73
%	2.2	2.0	5.0	3.5	4.4	8.3	1.2	0.7	5.3	5.8	0.7	3.3	4.2	3.0
2-1-5	11	3	1	14	11	6	4	10	25	6	13	52	13	145
%	3.1	6.0	5.0	9.9	6.0	12.5	0.8	7.4	8.2	7.0	4.8	7.1	11.0	5.9
2-2-1	17	5	2	15	7	1	19	9	30	6	16	48	3	158
%	4.7	10.0	10.0	10.6	3.8	2.1	3.9	6.6	9.9	7.0	5.9	6.6	2.5	6.4
2-2-2	8	0	1	1	1	0	1	2	0	2	3	8	1	19
%	2.2	0	5.0	0.7	0.5	0	0.2	1.5	0	2.3	1.1	1.1	0.8	0.7
2-1-6	16	1	0	1	1	5	3	2	9	7	1	10	5	40
%	4.5	2.0	0	0.7	0.5	10.4	0.6	1.5	3.0	8.1	0.4	1.4	4.2	1.6
3-1	25	0	1	5	8	1	1	5	4	2	10	14	4	51
%	7.0	0	5.0	3.5	4.4	2.1	0.2	3.7	1.3	2.3	3.7	1.9	3.4	2.1
3-2	6	3	0	1	2	0	5	4	2	0	1	29	2	47
%	1.9	6.0	0	0.7	1.1	0	1.0	2.9	0.7	0	0.4	4.0	1.7	1.9
3-3	12	2	0	8	34	4	55	7	16	0	14	29	2	169
%	3.4	4.0	0	5.7	18.7	8.3	11.3	5.1	5.3	0	5.2	4.0	1.7	6.9
?	10	0	1	8	8	0	3	5	20	1	9	36	3	91
%	2.8	0	5.0	5.6	4.3	0	0.6	3.6	6.5	1.1	3.3	4.9	2.5	3.7
合計	357	50	20	141	182	48	487	136	304	86	271	731	118	2,456
%	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
文の数	553	36	26	137	218	51	488	193	215	104	273	536	168	3,003

3. 誤用の実際とその検討

3-1 格表示における誤用と正用の関係

格表示の誤用は，分類項目中の「述語の種類と格助詞の選択に関する誤用」に該当するが，ここではその中のガ・ヲ・ニ・デを中心に取り上げ，その誤用の実態を具体的な誤用例に即して検討することにする[5]．

まず，ガ・ヲ・ニ・デの誤用を正用(本来あるべき形)との関係でまとめたものが次の表2である．

表 2　格関係表示の誤用

誤用＼正用	ø	ガ	ヲ	ニ	デ	計
ø		29	48	51	11	139
ガ	4		35	10	0	49
ヲ	4	39		21	0	64
ニ	21	8	28		37	94
デ	3	0	7	23		33
計	32	76	118	105	48	379

表2では，誤用の形を縦軸にとり，その誤用を訂正した形(正用)を横軸にとっている．ø は，その箇所に語がない場合を指す．以下，〈ガ → ヲ〉は，ガが誤用，ヲが本来あるべき形(正用)であることを示す．

この表2から，誤用を起こす格助詞にはいくつかの組み合わせがあるのではないかという仮説が可能になる．たとえば，誤用の多い組み合わせを順に示すと，次の通りである．

ヲ → ガ 39 例，ニ → デ 37 例，ガ → ヲ 35 例，ニ → ヲ 28 例，デ → ニ 23 例，ヲ → ニ 21 例

5) 格関係表示という意味では，ガ・ヲ・ニ・デの他にも，ノ・ト・カラ・マデ等の格助詞が存在し，調査例もみられるが，論点を明確にするため，本稿では上記の4種にしぼった．表1の〈2-1-1〉の総数と，表2・3の合計とが一致しないのはそのためである．

表 3　格関係表示誤用の国別分布

誤用＼資料	正用	① フランス (33)	② ドイツ (1)	イタリア (1)	豪州 (1)	アメリカ (3)	カナダ (1)	ブラ (2)	マレー (3)	タイ (3)	イン (1)	台湾 (4)	中国 (14)	③ 韓国 (14)	合計 (80)
ガ	ø				2					1			1		4
	ヲ	7				2	3		4	3	1	8	5	2	35
	ニ							1				3	5	1	10
	デ														0
ヲ	ø					1						1	2		4
	ガ	6	1	3	4	2	1		3	6	3	5	4	1	39
	ニ			1	1		1	2	1	3	2	4	6		21
	デ														0
ニ	ø					3			2	2	1	5	8		21
	ガ									1			7		8
	ヲ	7			1	2			3	4		4	5	2	28
	デ	4		2	2	4	1	3	2	3	2	5	7	2	37
デ	ø									2		1			3
	ガ														0
	ヲ									3			4		7
	ニ	4	1	1	2			2	3			3	7		23
ø	ガ		4					15	1	2		3	4		29
	ヲ		4				1	33	2	3			5		48
	ニ	4	1		2	3	1	26		3		2	8	1	51
	デ	2						4				3	2		11
合計		34	11	7	14	17	8	86	21	36	9	47	80	9	379
2-1-1		54	13	7	20	23	8	107	33	45	10	67	139	12	538
文の数		558	36	26	137	218	51	488	193	215	104	273	536	168	3,003

これ以外の誤用の組み合わせは，格表示のない誤用（ø）を別にすると，極端に少なくなっている．

これは，一方で，留学生の日本語作文においてはある特定の組み合わせの場合に誤用が生じるのは，何らかの意味・用法の上での法則性が潜んでいるからだということになる．したがって，この誤用の内容を具体的に検討することによって，誤用の性格と日本語の意味・用法との関係についても明らかにすることができるということになる．

3-2　格関係表示誤用の国別分布から

前項の誤用現象をよりくわしく見るために，国別の分布状況を示したの

が，次の表3である．

この表3にもとづきつつ，国別の違いについて見てみると，まず，助詞を省略する場合のブラジルの学習者の誤用がめだつ（ヲ33例，ニ26例）．しかし，一方で，このブラジルの学習者のガ・ヲ・ニ・デの各項での誤用はむしろ少ない．つまり，助詞を省略して表現する傾向は強いけれども，表現する場合には誤りが少ないということになる．おそらく口語的な表現になれているため，書きことばでも助詞をとばしてしまう傾向があると判断するのが妥当だろう[6]．

次に，全体の文の数に対して，この助詞の誤用が少ないのは，フランス・アメリカ・オーストラリア・インドネシアおよび韓国の学生である．また，それ以外の国の学生の作文には助詞の誤用が多いということになる．たとえば，韓国の学生の場合，全体的に日本語レベルがかなり高く，一読する限りではほとんどめだった誤用がないという状況である[7]．その意味で，特定の国に誤用が集中していないかぎり，そこに学習者の母語の影響を認めるのはかなり困難であり，むしろ，学習者個人の習熟度と見た方がいいかもしれないが，現在のところでは判断がつかない．

以上のような状況は，やはりそれぞれの格助詞について具体的な誤用例について検討すべきであることを示唆するものであろう．

3-3　格関係表示の誤用の実際

3-3-1　ヲとニの混同について

表2において，誤用が多いのはガとヲ・ヲとニおよびニとデであることを指摘したが，ここではその問題を中心に検討してみることにする．

---

6)　この理由としては，一つは，この被調査者の記述した作文資料が日記形式のものであったこと．もう一つは，被調査者が二名とも日系で，家庭では簡単な日本語で生活しているとのことであるためと考えられる．

7)　フランスの学生は登録制の外国語学校授業，金沢大学は課外補講，早稲田大学日本語研究教育センターの学部留学生は第二外国語振替の正規授業である．こうした学習形態は学習者の日本語能力とも関係が深い．

まず，数の上ではやや少ないが，ヲとニの混同について見ることにする．（　）内は国名略号および各資料の文番号．

〈ヲ→ニ〉

○いろんなしんせきなる人たちを会いましたけどしんせきということはきりないつなぎがあると思いました．（ブ 250）

○社会の中にいる人間はいくらでも障害者のための運動を参加しなければないという心を私はもっている．（マ 187）

○まず，外国人については大学生として入学するためには「日本語能力試験」を受からなければなりません．（伊 016）

○もしあの特別の女の人を会えましたらいいですけれども，だんなさんになるためにだけ結婚しません．（加 049）

○例えば，教養部で行われた留学生のための日本語のコースを週に三回行きますし，言語部とドイツ語部の講義にも一回ずつはいっています．（豪 007）

○きょうは，私たちは内灘海浜公園へ行って日本海凧揚げ大会を参加した．（中 160）

○結婚してから家庭の事と子供を育てることを専念したいです．（中 334）

○金沢大学は美しい環境を囲まれている．（中 341）

○そこから十五番の野町駅へ行くバスを乗り，終点まで行けばよろしい．（イン 086）

○やはり，新聞や本を読むことより，ずっと便利だと思うが，マスコミの代表として，子供や人々の身を入りやすいため，正しく知らせないのはならないのだ．（タイ 200）

○国際化がすすむためといってもほかの国のことを非常に感心をもって自国のことを忘れてはいられない．（タイ 205）

〈ニ→ヲ〉

○着いたのは九時にすぎましたからあの二人と食べに行きました．（マ

135)

○華僑たちは自分の子供の将来のために，外国にいるとき，自分の子供を祖国へ送っていって，りっぱな母国語や，優れる環境で，歴史，文化などの知識を勉強させて，自国のいろいろなことを忘れないように頑張っている心は私に感動させる．自分の子供は中国人だから，中国の長い歴史を知らないとはいけない．(台 147)

○そしてテレビのドラマは他人の一生をただ何時間の間に作って，私達に楽しませてくれるのである．(台 243)

○とにかく，将来の私が過去にふり向いて，子供のころの私が今を私を見れるなら尊敬を出来るかなということを何時も意識しております．(米 098)

○このような事にいくら考えても役に立ったないからがんばって勉強しようと思っている．(タイ 144)

○日本語の授業に怠ってしまうというケースも少なくない．(韓)

以上の例からもわかるように，これらはすべて目的格としてのヲ・ニを相互に誤った例である．〈ヲ → ニ〉も〈ニ → ヲ〉もヲまたはニのいずれかの格をとる動詞であり，両者のうちどちらをとるかが，つまり述語との関係把握が目的格のヲ・ニの選択において混同していると見ることができる．

3-3-2　ガとヲの混同について

同じ目的格でも，ヲの場合はやや異なる事情が考えられる．

〈ガ → ヲ〉の場合は，本来ヲとすべきところをガとした誤用で，〈ヲ → ニ〉〈ニ → ヲ〉同様，用いられている述語(「きれいにする」「やる」「発明する」「喜ぶ」「思い出す」「忘れる」「持つ」「見る」「行う」「勉強する」「高める」「(頭に)いれる」「受ける」等)に対する格機能についての把握が十分でないためということが言える．それはすなわち，述語の要求する助詞が何であるかが体得・理解できていないということでもある．

〈ガ→ヲ〉

○魚を流れへ放す前に，まず水がきれいにするはずです．(マ 125)

○10年後，多分仕事がやっているかもしれません．(加 039)

○人間は科学の発達から先端の科技製品がぼつぼつ発明してきた．(台 058)

○各界からの老人福祉に関する学者と専門家たちと顔をあわせられることが心わる喜びます．(台 094)

○サケの放流は水質浄化にどのぐらいの程度役に立てるかと私はその疑問が出した．(台 120)

○だが，子供は外国にいるあいだに，どんどん母国語が忘れてしまったのである．(台 142)

○ほとんどの華僑はそういう気持ちが持っている．(台 149)

○英国という侵略軍は中国入って「奴役」政策が行なって，中国は四，五十年のあいだに堕落で徐徐に遅れてきてしまった．(中 011)

○午後と夜は私は研修室で自分の論文を書いたり，計算機の使い方が勉強したりします．(中 146)

○だからこそ，人権意識が高めることが必要なのである．(中 529)

○ところが，私は今日本にいるから，技術，専門の事などができるだけ頭にいれたいが，生活のためにたくさんお金がいる．(タイ 142)

○みんなしているので，安らかな気分で授業が受ける．(韓)

ここで考えなければならないことは，目的格のニとヲが混同することは有り得ても，ヲがなぜガと混同するのかという点である．なぜなら，その用語や学習形態はさまざまであっても，一般には主格にガ，目的格にオと学習すると考えられるので，こうした誤用が数の上でヲ・ニにまさっているのにはそれなりの理由があると考えざるを得ない．

そこで次のような例に注目してみる．

○私は昔私の子供のころ清い河川の中に魚の泳ぐ姿がよ（く）見ていたが，いまの子供達にとってはほとんど見えなくなったでしょう．(台

188)

この例の「見る」は，同じ文の後半部で「見える」となっており，可能形と紛れやすい．もし，「見る」が「見える」であったなら，これは誤用ではない．

こういう観点から，本来ガとすべきところをヲと誤った例に目を移すと，類似した問題が現れてくる．次の例は，その〈ヲ → ガ〉の例である．

〈ヨ → ガ〉

○もしこの番組を少年少女達が毎日テレビで放送されたのに見たら危ないごと思っている．(マ 157)

○そういう見方を出てきた理由，日本人は日本のことが日本人しかわからないという特別閉鎖的な考え方をいつも持っているからである．(マ 191)

○Japantent で日本語だけを共通語として組織者に使われたのはあまりよくなかったと言う人もいるようです．(伊 001)

○又，英語だけでなくどこの国でもその国独得の言葉があるのを分かって来るでしょう．(伊 022)

○日本の大学に行くなら，日本語で書いてある本を不自由なく読めるし，講義をだいたいわかるものです．(豪 028)

○今さえおもいだしたらほんとうになつかしいですが，時間は矢と同じように早く逝っけ，子供時代のとは頭の中に朦朧の印象だけを残されています．(台 072)

○その風の中に草花のいい香りを含まれていました．(台 173)

○北陸での留学生の数を増えるに連れて，学内も留学生のことを考えし始めている．(台 258)

○もし，あの障害の人が私であたらと考えはじめると，人間は自分がこの世に存在する価値と尊厳性を少しでもわかるようなるだろう．(台 269)

○中国の歴史の参考書によると，公之前二千二百年ごろ，中国の朝廷が

始まったことを知られている．(中 002)

○時時手術をおわらないので，日本語の授業が出られないに困まてしまう．(中 145)

○でも私の印象についてのその時ではたくさん話しますから時間をたくさんかかりますのででも結果か少ないです．(独 011)

○そうしないと相手が話しをよく聞こえません．(米 124)

○この大学をよく金大とよばれて，今の主なキャンパスは丸の内地区，宝町地区，小立野地区の3地区に分かれて，今年の秋になると角間という新キャンパスも金大の一つのキャンパスになるそうである．(イン 002)

今日本語をだんだん理解できるが，まだテレビのニュースや新聞を読むことがわからない．(タイ 031)

○この時代の間に初めて日本と商談しうることがあり，1756年にビルマ人と戦争してアユタヤーと言う首都をやけてしまったので首都を変わた．(タイ 055)

○第二次世界大戦を終ってからタイは戦敗国になったけれども今発達している国である．(タイ 058)

本来ガとすべきところをヲとした誤用の場合は，上に示した例文のように，述語の形式が受身や可能(可能動詞を含む)である場合が多いことに気づくだろう．たとえば，自他同形のもの(「おわる」)・受身形のもの(「放送される」「使われる」「残される」「含まれる」「知られる」「よばれる」)・可能形のもの(「わかる」「理解できる」)がある．〈ヲ→ガ〉39例中，25例がこうした述語形式のものである．

日本語における，こうした述語部分の構造と機能によるヲとガの転換は，「主格＝ガ，目的格＝ヲ」という一見対照的な格として学習した者にはなかなか理解・体得はむずかしいであろう．〈ガ→ヲ〉および〈ヲ→ガ〉の混乱が今回の調査中最も多く現れた現象は，こうしたところにあるのではないか．

*

以上，ヲ・ニの混同は，一項動詞の場合の目的格のとり違いにあることがわかった．また，ガ・ヲの混同は，述語の性格(自他)や述語部分のアスペクト等の変化によって転換するガとヲの機能の把握不足によるものであると判断できる．

ニとヲはそれを要求する動詞によって規定されるため，同じ目的格という範疇の中で，学習者はその近接性ゆえにとまどうのであろう．ガ・ヲの場合も主格対目的格という対照的な関係につねにあるわけではなく，むしろアスペクトの変化等によって転換し得る近接性を有しているともいえる．動詞の自他や使役・可能等によって，ガ・ヲ・ニが転換し得ることを文全体の中でどのように把握し，それをどのように表示するかということが第2言語習得としての日本語学習の課題の一つであるわけだが，その転換の機能構造がわからないために，こうした誤用が起きるのだと考えられる．

3-3-3　ニとデの混同について

意味・用法の近接性という点から言えば，ニとデの場合は，きわめて近い関係にあることがわかる．

○5月5日明天は学校に授業があるので，早く名古屋から帰って来ました．(台 220)

○外に Japan Tent の人に会って海の方へ行きました．(ブ 048)

○福井駅に友達と会った．(マ 025)

○しかし，勉強をするにしろ，しないにしろ，学校は学問的にも社交的にも学生の生活にとても中心的である．(豪 105)

○いくら強く降っても濡れたまま，母親にみつけたまで雨中に遊んだり，走ったり，窪の水をけったりしていました．(台 071)

○金沢：へ：来た一週間に毎日学生食堂にひる飯を食べた．(中 188)

○日本料理の味や作る方法などは中国料理のがぜんぜん違って，いま，

自分でアパートに料理を作っている．(中 189)

○日本は世界に成功しているからやきもちの気持ちは当然です．(米 108)

○最近，子供を外国へつれち行って外国に仕事する日本人が沢山になった．(イン 069)

〈デ→ニ〉

○日本で一年間留学している間とっても楽しい一年間だった．(ブ 004)

○岐阜で住んでいる友達がとてもびっくりしたので，十分ぐらい何もされなかった．(マ 030)

○このほか，週に三回大学本部で日本語勉強しに行かなければならないと思う．(中 144)

○窓の外での露台で洗濯機あって，私は毎週日曜日に使っている．(中 157)

○しばらくすると始の印象がかわります．私は今大学でいますから，これは大学でもらった経験の話です．(独 004)

以上の例からもわかるように，ニとデの混同は，そのほとんどが場所を表す用法においてである[8]．それは，ニとなるべき場合もデとなるべき場合も同様である．ガ・ヲ・ニの場合と異なるのは，ニ・デがいずれも場所格の場合であるという点である．この場合もニをとるかデをとるかは基本的には述語によって規定されており，広くは述語の種類と格助詞の選択という問題であるが，学習者にとっては，ニ・デのどちらも場所を表す格助詞として認識されるため，この使い分けが一層むずかしいものとなるのであろう．

デの誤用はニとの混同23例をのぞくと，ガとの混同7例のみであり，

---

8) 1例のみであるが，ニとあるべきところデとした誤用で，オノマトペを引く際にデを用いた例があった．

○子供が言葉の勉強をすることには，覚えはやいので，間もなく，外国語がペラペラではなせるようになった．(台 141)

ニの誤用はデとの混同37例の他はガとの混同8例にすぎない．ヲとの混同が28例見られるのは，次に示すような場所を表す例があるからである．

〈ヲ → ニ〉

○キャンパス(学園)には門が沢山あるが一番近い道は，県立体育館よこの門から坂をおりてまっすぐいって，市役庁の交差点まで，右まがって，109デパート手前の大通りまで左をまがって大通りを沿って犀川橋を渡って，まっすぐ三番目交差点のよこは北国銀行があって，そして，右をまがってまっすぐいくとのまちの駅があって，泉学寮はちょっと駅のうしろにある．(台 115)

○うな新ビルはと中央公園の玄関を向かっています．(中 323)

〈ニ → ヲ〉

○例えば，天気がよければ，自転車に乗って金沢の名所に見に行ったり，天気がよくなければ友達に遊びに行ったりします．(豪 011)

○もし河川にまずきれいにしないと稚魚を放流してサケが生きてるわけがないと思う．(中 365)

○石川橋を渡して，立派な石川門に入ると，金沢大学の建物が前に現れた．(中 433)

○そして，「すかいらく」というレストランの前を通って，猿丸神社のそばにある坂道を歩いて，左にある一番目の角に曲って，「ゆたか荘」というアパートがすぐ見える．(マ 093)

3-3-4　その他の問題

その他，格表示が行われない場合との関連で，日時や曜日などを表す語が副詞的に用いられる場合の誤用についての例が挙げられる．これらはいずれも〈格助詞 → ø〉として現れるもので，格助詞相互の転換の例はない．

○十年間が立ってから，私は相場でもうけて，もう大金持になったと思います．(豪 063)

○授業は，週に六回がありますが．(中 230)

○日本で4年半学ぶ時子供一人が生まれた．(タイ 004)

○お弁当を持って，五時間に勉強します．(中 232)

○それから，ほとんどの時間に実験をやっています．(中 241)

○工学部からうな新ビルまで自転車で15分ぐらいをかかります．(中 324)

3-4　まとめ

以上の格助詞の誤用は，語彙選択の誤用と並んで，その比率が高いが(表1参照)，その誤用の実際から，次の ①～⑤ のようにまとめられる．

①誤用の組み合わせは，ガ・ヲ／ニ・ヲ／ニ・デに集中していること．

②ガ・ヲ／ニ・ヲの混同は，いずれも目的格あるいは対象格に関する誤用であり，これらはすべて述語動詞との関係把握によるものであると考えられること．

③ニ・デの混同は，場所を表す用法におけるもので，これが部分的にニ・ヲの混同とも重なってみられること．

④以上のような誤用について，国別あるいは母語別の有意的な差異は現在のところ発見できないため，むしろ学習者の個人的な日本語習熟度との関係でこうした問題を考える必要があるように思われること．

⑤したがって，本稿で取り上げた留学生の日本語作文における格関係表示の誤用は，両者の意味・用法が近接する場合に頻繁に生じていることから，その意味・用法や機能と深い関係があり，とくに述語の性格や種類を文全体の中でどのように把握し，それをどのような語によって表示するかという能力の問題として考えるべきだということ．

4.　これからの問題

ここでは，留学生の日本語作文における誤用例を資料として検討したが，作文という資料の性格上，使える表現と使えない表現の問題がある．

つまり，使えない表現は作文には出にくいわけであるから，これを調査対象とはしにくいからである．その点で，理解と表現の両機能を合わせて考えていく必要があることはいうまでもない．また，母語別分布についても，より広い範囲でデータを集していくことが求められよう．また，できるならば，同一学習者の追跡調査によって，一定に期間の能力の伸びと誤用の関係を調査することが必要であるが，こうした縦断的な[9]調査研究にはそれなりのカリキュラムを組む必要がある．今後の課題としたい．

また，今回の調査から指摘できる「語彙選択の誤用」と「格関係の誤用」を第二言語習得における日本語のむずかしさとして位置づけるためには，なお十分な検討が必要であるが，この問題は，母語獲得としてのむずかしさの問題とも関わりが深いと考えられる．母語獲得における誤用と，第二言語習得における誤用とを比較すると，そこには誤用の階層とでもいうべきものが存在ではないかということを細川 (1990c) で指摘したが，たとえば語彙選択の場合，母語獲得において比較的誤用が少ないのに対し，第二言語習得ではこれがかなりの部分を占める．一方，今回は第二言語習得に限って考えた格関係表示の問題が母語獲得ではどのような展開を見せるのかはきわめて興味深いところである．その意味で，本稿で提案した誤用領域設定と分析の方法は，母語獲得と第2言語習得のメカニズムの相互比較への可能性を拓くものであると考える．

最後に，ここで検討してきた誤用分類の構成は，日本語の文構成を考える場合とほぼ同じ構成をなしているといえる．述語を核に，テンス・アスペクト等の補助形式が整えられ，修飾成分は，それを間接的に支えている．さらに，話者の主体性は主題とモダリティによって表され，それは主題の設定とも深く関わっている．こうして生成された文は，つねに場面・文脈の中で機能するため，談話との切り放しは困難である．こうした視点は，すでに日本語研究の立場からも提出されているが[10]，誤用におけるさ

---

9) 長友(1991)参照
10) 仁田(1990)・益岡(1990)参照

まざまな実態を整理する段階で，こうした日本語の体系が浮かび上がってくることをここで確認しておきたい．

〈引用例文中の国名略号〉

台＝台湾　イン＝インドネシア　ブ＝ブラジル　伊＝イタリア　加＝カナダ　中＝中国　マ＝マレーシア　米＝アメリカ　豪＝オーストラリア　独＝ドイツ　仏＝フランス　韓＝韓国

«引用文献»（著者別五十音順）

寺村秀夫（1972）『日本語の文法　上・下』（国立国語研究所）

――　（1982）『日本語のシンタックスと意味　I・II』（くろしお出版）

長友和彦（1991）「誤用分析研究：日本語の中間言語の解明へ向けて」（『文部省科学研究費補助金研究成果報告書・第2言語としての日本語の教授・学習過程の研究』〈研究代表者・細田和雅〉）

仁田義雄（1990）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」（『日本語のモダリティ』くろしお出版）

細川英雄（1989）「現代日本語の形容詞分類について」（「国語学」158）

――　（1990a）『金沢大学外国人留学生の日本語作文』（金沢大学教養部日本語日本事情研究室）

――　（1990b）「フランス人の日本語作文における誤用とその種類」（金沢大学教養部論集・人文科学篇 27-2）

――　（1990c）「言語学習と誤用の階層」（『深井一郎教授退官記念論集』〈『日本語を発見する』〉（勁草書房 1990）所収）

――　（1991）『金沢大学外国人留学生の日本語作文・分析編』（金沢大学教養部日本語日本事情研究室）

益岡隆志（1990）『モダリティの文法』くろしお出版

水谷　修（1961）「日本語のむずかしさ―日本語を外国語として学習する外国人の書いた文章に現れた誤りの分析―」（「国語研究」（國學院大学）12号）

◇本稿は，研究発表「誤用分析と日本語研究」（早稲田大学日本語研究教育センター主催　日本語・日本語教授法研究会 1991.07.11）での草稿の一部をもとにしたものである．多くのご教示をいただいた参加の方々に厚く御礼申し上げる．